

---

# Red Blood HOSPITAL

Yossi-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Red Blood HOSPITAL

### 【Nコード】

N6379H

### 【作者名】

Yossii

### 【あらすじ】

悪趣味な名前の病院…『RedBloodHOSPITAL』。  
そこに勤めていた看護師は、患者と約束をした。約束事を忘れていた看護師は、どうなる!?

ある事が原因で、今は、使われていない『Red Blood Hospital』。名前が、とても不気味なこの病院は、何の変哲も<sup>へんてつ</sup>ない普通の病院だった。ある時まで……ネ。

私が、この『Red Blood Hospital』で働いていたのは、もう十年も前の話。不気味な名前とは裏腹にこの病院には、患者がいつぱいだった。しかも、不思議な事に、ドクター達は、患者や患者の家族に、とても慕われていた。病院の内装も、広いけど、誰にでも分かりやすいように、廊下を長くして両脇に、五十音順で病室を作つてある。十人部屋の大きい病室で、人が行き来しやすい。そんな、ある日。

私が夜勤で、同僚四々五人とナースステーションで仕事をしていると、ナースコールが鳴った。

「……田中さんだ。どうしたんだろう？明日、退院なのに。」  
「理由なんて関係無いよ。早く行かなきゃ」

とりあえず、私は、懐中電灯を手に、田中さんの病室へと急いだ。

「田中さ〜ん、どうなさいました？何処か、痛いんですか？」

ベッドを見てみると、田中さんは、静かに寝息をたててグツスリと眠っていた。私の頭の中には、『？』がいつぱいだった。納得のいかないまま、ナースステーションに戻った。

「あつ、田中さん、どうだった？」

「……うん、それがね、本人はグツスリ寝てたの。」

「じゃあ、何だったんだろうね？ま、いつか。何も無いんだつたら……」

私達は、特に気にせず、仕事を続けた。

そして、午前二時頃。再び、ナースコールが鳴った。田中さんを除

いて、二三人の人達もナースコールを押していた。ナースステーションに、同僚一人が残り、私と、他の同僚達が、それぞれ、ナースコールを押していた病室へと、入って行った。しかし、二三分もすると、私以外の同僚は何事も無かつたらしく、すぐに出てきた。ただ、田中さんが、痙攣を起していた。しかも、とても危ない状態だ。同僚にドクターを呼んできてもらい、ドクターが来るまで、私は、田中さんに声をかけ続けた。すると、田中さんは、口を開いた。「・・・足元、足元に何かいるっ！・・・助けてくれ」

田中さんの足元を見ると、確かに、何かがいた。

・・・それは、頭だった。口が耳まで裂けた、醜い顔の。でも、何処かで見た事がある気がする。ジーツと、その顔を見ていると、その顔は、ニヤツと笑って、消えていった。

そして、次の日。田中さんは、何事も無かつたかのように退院していった。昨日の事を、田中さんに聞いても、顔を真っ青にして、何も言おうとしなかった。昨日、ナースコールを押した、他の人達にも聞いてみたけど、全員が口を揃えて『自分は、押してない』と言って、そそくさと何処かに行ってしまった。他のナースに聞くと、そんな事は、体験した事が無い、と言う。

また、私が夜勤の時。同じ事が起きてしまった。明日、退院できる人の病室からナースコールがあった。でも、見に行くと、その人は、グッスリ眠っている。それでも、午前二時頃になると、私が、見る人は、痙攣を起して、危ない状態に陥<sup>おちい</sup>っている。

そして、やっぱり、痙攣を起こす、その人の足元には、醜い顔の頭が笑って転がっている。私と目が合うと、消えていく。でも、次の日には、何事も無かつたように、皆、退院して行く。

そんな事が続いて、ナース達の間で、噂と不安が広がっていった。中には、辞めていく人もいた。私だけが、あの醜い顔を見ている。今までの、カルテを見直す事にした。

すると、今から、ちょうど九年前・・・、私が、まだナースになりたての頃。

ある工場で、ガス爆発が起きた。その時、ちょうど旦那さんに、お弁当を届けに来た奥さんが巻き込まれた。その奥さんは、顔が焼き爛れ、全身大火傷のヒドイ怪我をおった。旦那さんも一緒に運ばれて来たのだが、応急処置の甲斐も無く、搬送中に亡くなった。奥さんは、ギリギリ手術を乗り切った。奥さんが、目を開けた時、旦那さんの事を話した。話したのは、新米だった、私。旦那さんを失った彼女は、発狂した。そして、彼女は、次の日、病院の屋上から飛び降りた。その時に、彼女は出っ張っていた木の枝で、口を切ったのだらう。彼女の口は、耳元まで裂けていた。彼女を発見したのは、私だった。まだ、息があつた彼女は、私を見て、笑つて死んでいった。

私は、この事を調べている内に、彼女との約束を思い出した。旦那さんの事を話し終わつた、私は、耐えきれず病室から出ようとした。そんな、私は、彼女に呼ばれた。

「・・・あの、看護婦さん？私が、死んだらココに・・・、ううん、この病院に、花瓶に花を活けて欲しいの。」

「・・・ハイ、分かりました。病院の何処かには花を活けるようにします。」

「ありがとう！でも、約束したからには、ちゃんと守つて下さいね。」

彼女は、無理に明るく振る舞っているのは、一目瞭然だった。その次の日に、彼女は自殺してしまつた。発狂したのは、そのすぐ後だった。

忘れていた彼女との約束。それを、思い出した、私は、病院中を探した。やっぱり、彼女が出てきたのは、花を活けていなかつたらだ。その日、私は、花屋に寄つて歸つた。

次の日、私は、昨日買った花を、花瓶に入れて、ナースステーションの前に飾つた。それでも、まだ、花は余つていた。他の花瓶を探して、飾れる所に飾つた。とても、華やかな感じになつた。その日、私は、夜勤だった。彼女のいた、病室からナースコールがあつ

た。その病室は、今は、誰にも使われていない。私は、彼女だと、確信を持った。同僚に止められたが、私なりに彼女に謝りたいと思つて、走つて病室に向かった。

病室に着いた。彼女は、窓際に立っていた。

「・・・約束、忘れてたんだね。看護婦さん。」

「ごめんなさい。でも、貴女あなたが、人を驚かす程度の悪さをするだけで良かった。もっと、人を殺すとかしてたら、貴女あなたに気付かないところだった。」

「私も、人を殺そうとは、思わない。・・・約束を守ってほしかっただけだから。」

「本当にごめんなさい。これからは、絶対、絶対忘れないようにするから。」

「ううん、それは、もう良いの。今日は、お礼が言いたくて。・・・最後に、約束を守ってくれて、ありがとう。」

彼女は、そう言い残すと、コチラを振り返った。彼女の顔は、とても、キレイだった。

それから、数年後。私は、ナースを辞めた。人の死と向き合うのに、嫌になったからだ。今は、『Red Blood HOS  
PITAL』で診察を受けている。『Red Blood H  
OSPITAL』では、今も、キレイな花が飾られている。

(後書き)

初めて投稿するので、緊張で、上手く書けているか心配なのですが、少しでも気になったら読んでみて下さい。

クレームとかは無し、お願いします(^。^。^(

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6379h/>

---

Red Blood HOSPITAL

2010年12月14日17時52分発行